

実施期間・参加人数・滞在都市・現地交流校について

平成 25 年 6 月 28 日～7 月 11 日までの 14 日間、1 年生 5 名、2 年生 12 名、3 年生 6 名がイギリスのグランサムにホームステイしながら、Kesteven and Grantham Girls' School と交流しました。

実施概要について

- ① 本校生徒 23 名および引率教諭 2 名が本校の姉妹校 KGG S を訪問し、授業や諸活動に参加することで、現地の生徒との交流を深めることができた。
- ② ホームステイを通して、イギリスの生活・文化・習慣を学ぶことができた。
- ③ 名所旧跡を訪ねることにより、イギリスの歴史や文化に触れることができた。
- ④ 姉妹校での滞在 2 日目に、学校関係者とホストファミリーとが集まり盛大な歓迎パーティが行われた。その際に英語で、福島県沿岸部の状況や原発事故による放射線の影響で一時は避難者が出たものの、様々な活動により福島がかつての元気を取り戻しつつあることを伝えた。また、各ホームステイ先でも、原発事故後の福島の様子をできる限りの語彙を駆使して伝えた。

福島の現状発信や現地におけるエネルギー学習について

新エネルギーについては、スケグネス市沖にある海上風力発電施設やリンカーンシャー州の巨大な石炭による発電施設を見ることができ、原発以外のエネルギーについて考えるきっかけとなった。



実施後の反省について

イギリスのエネルギー状況や、イギリスの文化などについて多角的な事前研究を行っていたために、現地で経験したことを比較、検証することができた。姉妹校での交流では、生徒たちは聞き慣れない British English に悪戦苦闘していたようだが、年の近いパートナーともっと話したいという動機から、生徒たちなりに会話を成立させようと必死に努力した様子が伺えた。事実、姉妹校交流の最終日に、あるホストマザーが我々引率教諭に、本校の生徒の英語力がこの短期間で飛躍的に伸びたことを実感したらしく、その努力を是非褒めてあげてほしいと伝えてきた。震災後の福島の様子については、震災以降、姉妹校側で関心のあることであり、昨年同様、原発の現状であったり、生活の様子について、生徒なりに伝えることができた。また、イギリスのエネルギー事情の一端を学べたことは、今後の日本のエネルギー政策を考える上で、非常に有意義であった。今回の交流のおかげで、生徒たちの中にイギリスをより身近に感じるようになった生徒や、授業で学ぶ内容が決して受験のための英語ではなく、実際の会話で使用できるものだと感じた生徒もいた。福島の将来を担うという視点において、生徒たちの大きな成長を促す結果になったと感じている。